

居場所における人間発達に関する研究

岡田 和秀

本研究は居場所支援における人間発達について明らかにするものである。今、子ども、若者たちが不登校やひきこもることによって居場所を喪失するという問題が起こっている。青年期、若者期における発達課題の多くは人間関係の中で達成されるが、不登校、ひきこもり当事者はその機会を奪われている。そのため、当事者たちの集団での発達を保障する居場所支援の展開が求められてきた。

居場所における発達支援とはいかなるものであるのか。石川良子(2007)は、居場所参加者たちが「〈社会参加〉したいのに、どうしてもできない」という葛藤を抱え、身動きが取れなくなっていることを指摘している。なぜ当事者はその葛藤を乗り越えられずにいるのか。この問題の背景には支援者側に発達の視点が欠けていることが挙げられる。それに伴い発達課題の設定が適切に行われていない可能性がある。ひきこもり支援は就労支援を中心に展開されているが、そこでもまた発達という視点が欠けている可能性がある。就労支援だけでは社会参加が困難な若者が大勢いる。彼らはなぜ社会参加できないのか。そこには就労のための発達とは別に達成されるべき発達課題が存在しているのではないだろうか。

ロバート・J・ハヴィガースト(1972=1997)は発達課題について「発達課題は個人の欲求と社会からの要請の中間にある」としている。今日の社会が求めるのは就労であり、社会からの要請は就労に固定化されてしまっている。発達が中断されている当事者たちにとって、自身と社会からの要請が遠く離れすぎてしまっている可能性が高い。それに伴い発達課題さえも自身から離れすぎてしまい、その達成が困難になっている可能性があるのではないだろうか。社会からの要請が就労に固定されていることは、当事者たちにとって就労への強いプレッシャーへとつながる。そのため居場所支援のあるべき姿として、その社会からの要請を意図的にコントロールし、当事者が安心して発達できる環境をつくり出すことが求められるだろう。

就労のためにクリアすべき発達課題を羅列しチェックリスト化してしまえば、当事者の発達がかえって困難になる可能性が高い。発達課題とはあらかじめ用意されるようなものばかりではなく、様々な場面で現れてくるものである。そのため当事者のペースでの発達を保障しなければならない。

特に発達課題を設定する際に、大雑把に社会参加のための発達課題というような設定の仕方は危険である。そこにはいくつもの、例えば就労のための、人間関係を築いていくための、人生そのものを豊かにしていくための発達課題があり、それらを一まとめにしてしまってはならない。発達課題とはそれぞれがバラバラに達成されるものではなく、絡まり合いながら達成されていく。だからこそ何を為すための発達課題なのかが問われなければならない。不登校、ひきこもり当事者は居場所を失い、人間関係を失った状況にいる。その状況の中では発達はやみくもに達成できるものではなく、意図的に設定する必要がある。特に就労を求める社会からの要請は、当事者の個人の欲求を捻じ曲げ、個人の側、社会の側そのどちらともを就労の達成にしまいかねないほどに強いものである。そのため当事者は強い焦りと就労できないことへの自責感に駆られる。そうした焦りの原因となる社会からの要請を居場所支援は和らげ、安心して発達できる空間をつくり出さなければならない。

なぜ当事者は「〈社会参加〉したいのに、どうしてもできない」のだろうか。発達に視点は非常に重要ではあるが、やみくもに発達支援を行ったところでその効果は薄い。発達課題を適切に設定することができて初めて、この問題の解決に挑戦できるといえるのではないだろうか。発達とはいくつも絡みあって存在している。それを一つだけ抜き出して達成することは困難である。ひきこもり支援において就労支援ばかりでは社会参加が困難であると同時に、居場所にとどまり続けるという事態が起こっているのは、就労のための発達課題ばかりに気を取られるあまり、それ以外の、人間関係や日常生活といったところで現れてくる発達課題が疎かになっているのが大きな原因である可能性が高い。就労のための発達だけではなく、その他社会参加にかかわる全ての発達課題を捉えることが重要である。そうした発達は就労を求める社会からの要請に晒されているのは困難である。居場所支援に求められる発達保障とは、社会からの要請をコントロールし、当事者のペースで発達課題に取り組める場、集団を保障し、その発達を可能とすることなのである。